

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 2 2 9 号

2021 年 5 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三  
電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

佐生健光『キリスト教と称名』より (14)

### 信仰と称名の関係

ここで信仰と称名の関係について考えてみたい。

旧約聖書の時代には、人が義とされるためには「称名」と「律法の行い」の二つの方法が示されていた。パウロはそのうち一つの「律法の行ない」によって義とされることはない、否、律法によって義とされようとする者は、キリストの恵みより堕ちたとまで言って「信仰」による義を説いた。その訳は律法によって義とされようとする者は、神に対して自分の義を立てようとするものであり、それは神ではなく、自分に栄光を帰するものである。そのような義は、神の前では認められず、この方法による義人は一人もいないという。それは、ローマの信徒への手紙 3 章前半までに論じられている。

21 ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。

22 すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに

与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。

23 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、

24 ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。(ローマの信徒への手紙 3・21-24)

## イエス・キリストが所有したまう忠実

ここにしめされた義を、一般に信仰による義と言う。しかし、22節の「イエス・キリストを信じることにより」という言葉は他の訳もありうる。原文を直訳すると、「イエス・キリストの信実をとおして」となる。この意味を小西芳之助先生は、概略以下のように説かれた。

「の」という前置詞は、目的格にもなるし、主格にもなる。例えば、「英語の勉強」の「の」は、英語を勉強するという目的格となるが、「英語の力」の「の」は英語が持つ力という主格にもなる。22節を日本語訳聖書では、「イエス・キリストの信実」の「の」を目的格に訳しているが、私はこれを主格として訳し、「イエス・キリストが所有し給う」と解釈する。

また、[ギリシア語で]「ピストス」の原語は「信仰」という意味もあり、「忠実」という意味もある。日本語訳聖書は「信仰」と訳しているが、私は「忠実」と訳し、この章句を「イエス・キリストが所有し給う忠実」即ち「イエスキリストの贖いによる神の義」としたいと言われた。何故なら、イエスが一生を神に忠実に過ごされ、最後は父なる神の御心に従って十字架を負い、復活されたご生涯は、全て父なる神に対する忠実であり、それは「人間の罪の贖い」のためであったからである。この講解を聞いて、私ははじめて信仰が理解できたように思った。

## 常に義とせられつつ

内村鑑三先生の一文を以下に記す。

われらは悔い改めて神に帰するに至った後といえども、決して全ったき清浄無罪に達するものでない。波乱重畳は実に信仰生活の常の姿である。比較的清きこともあるが、罪におちいりてかなしむこともまた度々である。……そのために自己を偽善者とみて大いに失望し、その極、ついに信仰を捨つるものも少なくない。ある人は悔い改めし後の人生において人は決して罪を犯さないという。しかし、不幸にして、これ、我等の実際の経験と相反している。人は信仰に入りても常に罪を犯しつつあるのである。

ここで我々は自分が行いも、信仰も落第生であることを再認識する。我々は、信仰のみによっては義とされ、救われるのは困難であると悟るのである。そして、主を呼ぶのである。しかし、内村先生は続けて言われる。

ゆえに「常に語とせられつつ」行く必要が起こるのである。人の信仰においてなし得ることは、絶対的に罪を犯さないことではない。十字架のキリストを仰ぐことである。そしてこの信仰のゆえに、人は「常に義とせられつつ行く」のである。ゆえに「常に義とせられつつ」すなわち「デイカイウーメノイ」の一語は、常に悩めるキリスト者にとりては大いなる慰めの語である。(内村鑑三　ロマ書の研究3・21-26)

## デイカイウーメノイ

デイカイウーメノイという言葉は、「義とされる」を原語とするギリシア語で、文法上、現在分詞・受動態となり通常、「～されているときに」、「～されているうちに」などと訳される。従って、「常に義とせられつつ」という意味になるわけである。

また、先生は、「十字架のキリストを仰ぐ信仰ゆえに、人は常に義とせられつつ行くのだ」と言われた。

地の果ての全ての人々よ

わたしを仰いで、救いを得よ。

わたしは神、ほかにはいない。(イザヤ書 45・22)

モーセは青銅で一つの蛇を作り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。(民数記 21・9)

モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

(ヨハネによる福音書 3・14, 15)

主を仰ぎ見て救われる方法も、「行い」や「信仰」には言及していない。……小西先生はどちらでもよいが、それを実行することを勧められた。

くり返して言うことになるが、我々は自分の信仰では救われない、主の贖いによって救われるのである。これはキリスト教の基本的な原理である。

## 「仰ぎ見る」と「称える」

救われる方法には、「仰ぎ見る」「称える」の二つがあるが、私は「称名」を推したい。それは、これが最もやさしい方法であり、私にはこれしかできないからである。主を見上げることができないほど、打ちひしがれたときでも、御名を称えることはできるからである。自分の信仰はどんな状態になっても、御名を称えることはできるからである。これらのことをひっくるめて、「信仰」と言うのである。

原理と、方法が分かったあとは実行するだけである。良薬の効能をどんなに聞いても、病気を治すことはできない。あとは飲むだけである。その飲み方には何も制限はない。どんな姿勢で、いつ飲むか、何度飲むかなどにも何の指定もないのである。

## 「主を呼ぶ」のではなく「主の御名を呼ぶ」

我々は、主を呼ぶのではなく、なぜ「主の御名を呼ぶ」のか。

イスラエルの民がエジプトを去り、カナンに向かって歩みを進めていたとき、モーセとエホバとの間には何度となく、応答があった。…モーセがエホバに対して、「あなたの栄光をお示してください」と願ったとき、エホバは答えられた。

「あなたは私の顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きて  
いることはできないからである」(出エジプト記 33・20)

ペテロがイエスの弟子になる前のこと。ゲネサレト湖で漁をしていたとき、夜通し網を下ろしても魚はかからなかった。イエスは彼に、沖に行つてとりなさい、とその場所を示された。ペテロが半信半疑でその通りにしたところ、船が沈むほどの魚が取れた。ペテロはイエスの足もとにひれ伏して言った。

「主よ、わたしから離れてください。わたしは、罪深い者なのです」(ルカ  
4・8)

私たちが、主を直接呼ぶことをせず、主の御名を呼ぶのは、このペテロの心理と共通するものがある。使徒パウロは、ダマスコ途上でイエスのお顔を見た途端、地に打ち倒され目が見えなくなった。超絶した高貴さに出会ったとき、私たちはこのようになる。罪深い私は、主は呼べない。主のお顔を心のうちにえがくこともできない。しかし主の御名は顔を伏せながらなら、呼ぶことはできる。これが私にとっての「主の御名」を呼ぶ意味である。

## たった一回称えて救われる

この称名は、本来は終末の時、自分がこの世界と滅亡を共にすることなく、永遠の命を得るために称えるものであった。それを、何時でも称えられるようにしたのが使徒パウロであった。我々は、終わりのときではなく、普段称えた「称名」で、しかも、たった一回称えた「主への呼びかけ」で救われるのである。それは、あまりにもやさしく、また、あまりにもよいことであるため、人はこれを愚かなこととしか思わない。

神は、何故にこれ程までして人を救おうとなさるのか。それは、今、我々にはわからない。神の思いは人の思いと異なるからである。しかし、父なる神はこのアガペーを以て、お立てになった計画を進めておられることは確かであろう。それは、かの日、我々も復活の光栄に浴する日に、明らかにされるであろう。

言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない、しかし、そのかた、すなわち、真理の霊がくると、あなた方を導いて真理をことごとく悟らせる。(ヨハネによる福音書 16・12, 13)

今や、我々は、自分の安心、自分の幸福を求める手を休めて、神のご計画が完成されるための材料の一つとなったことを喜ぶべきであろう。

## まとめ 救いの原理は十字架の贖い・その方法が「称名」

「称名」の流れは一貫して庶民の生活の内であった。「律法」の流れは学者、パリサイ人を代表する人たちのものであった。しかし、パウロは「律法」の流れを止めて、「信仰」の流れを見つけ、この流れによって人は義とされると、説いたのである。

しかし、パウロも言っているように「信仰」を自分の信仰とする限り、それだけでは義とされることはなく、同時にそれを告白して、はじめて救われるのである。それが、「称名」となるからである。

「救い」の原理となるのは、主の架かり給うた十字架の贖いによる。その方法が「称名」となる。

「称名」を行うには、時、所、その他の条件は何もない。以上を引きくるめて「信仰」と言う。

我々は主を呼ぶのではなく、「主の御名を称える」のである。それこそは、誰もができる救いの道である。なぜなら

「主の名を今までに一度でも呼び求めたものはだれでも救われるからである」神のアガペーは計り知れない。我々は、神のご計画完成のための一材料となったことを喜びたい。

## それからの称名（1）

「称名」がいかに重要であるか、ということを書いてきたが、今、日本のキリスト者たちはそれほど主の御名を呼び求めているとは思えない。日本だけではなく、世界のキリスト者も今は、特別に御名を呼び求めているわけでもなさそうである。あの「主の御名を呼び求める者はだれでも救われる」という、簡単明瞭な言葉を耳で聞き、目で見るとき、私は不思議な感を覚えずにはられない。

その理由は何であろうか。あくまでも私見に過ぎないが、思いついたことを次に2, 3述べてみたい。一つの理由として、次のようなことが考えられる

第1に、ローマのキリスト信徒に対する迫害である。それはAD65年頃から始められ、約250年にわたったといわれる。とりわけ、ネロ帝、ディオクレティアヌス帝の迫害は凄惨を極めたことは、歴史上著名な出来事となった。彼らの犠牲となったのは、殆どが庶民であり、社会の下積みの人たちであった。パウロは、コリントの信徒への手紙・Iで、彼らについて「知恵ある者、能力ある者、家柄の良い者は多くなく、神は無学な者、地位なき者、世のなきに等しい者、身分の賤しい者、見下げられている者を選ばれた」と言っているが、ローマの信徒も同じようなものであったろう。主の御名を呼び求めていたのはこのような人々であった。

多くの信徒が主のみ名を讃えつつ、天に召されていったことであろう。しか

し、生き残った者も、そのような状況の中で主の御名を称えることは、即、死を意味することになる。それは避けなければならなかった。おそらく、彼らの「称名」はうちわ同志に留めるようになっていたのではないか。そして、長い年月の経過とともに、やがて心のうちで、称える称名に変わっていったのではないか。キリスト信徒＝「主の御名を称えるもの」という曾ての図式は、次第に薄れていったのではなかろうか。

## 称名のないキリスト教

AD313年、コンスタンティン帝によりキリスト教は解禁され、地下のカタコウムは地上の大聖堂として姿を現してきた。彼は、ローマ大帝国の帝王である。彼を取り巻く人々は、社会の上層を占める人達であり、彼らは知恵あり、能力あり家柄良く、学あり、地位有り、世の有用な人達であり、身分高く、尊敬された人たちであった。

このような人々の奉ずるキリスト教は、「主の御名を呼び求める」キリスト教とは、おのずと一線が引かれたのではなかろうか。

知恵ある人、特に学者と言われる人達は、原理を重んずる。だから、彼らは信仰をも原理の追求から始めた。……彼らは原理を理解し、自分の信仰を確立することをもってよしとした。ここに、「称名のないキリスト教」が流布されていったと思われる。

多くの使徒、宣教者が福音を延べ伝えるために世界の各地に遣わされていた。彼らは、福音を効率よく伝えるため、その国の長を改宗させる方法も使用した。国王が改宗すればその周辺の人達も、改宗するであろう。やがて、庶民もキリスト教を信じるようになろう、というものである。このような場合、キリスト教は上から下の経路をとる。但し多くは、「称名のないキリスト教」となる。

## 明治以降のキリスト教の渡来

わが国の場合、キリシタン大名の誕生については、そのような経緯があったのではなからうか。明治、文明開化の時代になって再びキリスト教が渡来してきたが、天皇を改宗することはできなかった。

しかし、上層階級の一部をクリスチャンにすることはできた。特に知識人達がこぞって輸入した西洋文化は、キリスト教の知識なくしては十分な理解に到達することはできなかったもので、彼らは、キリスト教について熱心に研究した。だが多くはキリスト教というよりも、キリスト教文化の方に関心があったのではなからうか。

しかし、少数ながら、わが国にも日本人のキリスト者が育ち、日本人の説教者が生まれていった。しかしながら、このような経緯から、その信仰は「称名のないキリスト教」であった。現在、私たちの信仰と呼ばれるものは、おおよそ、そのような流れの内にあるものではなからうか。